

論文

保育学生が他学年で協同する 地域子育て支援活動シミュレーションの実践

Simulation of community childcare support activities carried out by students on the childcare teacher training course together with students from other grades

竹内 日登美, 三ツ石 行宏, 玉瀬 友美,
阿部 鉄太郎, 梶原 彰人, 野角 孝一 (高知大学教育学部)
川俣 美砂子 (中村学園大学短期大学部幼児保育学科)

TAKEUCHI Hitomi¹, MITSUISHI Yukihiro¹, TAMASE Yumi¹,
ABE Tetsutaro¹, KAJIWARA Akito¹, NOZUMI Koichi¹, KAWAMATA Misako²,

¹ Faculty of Education, Kochi University

² Division of Early Childhood Care and Education, Junior College, Nakamura Gakuen University

ABSTRACT

The Early Childhood Education course in the Faculty of Education at Kochi University was unable to conduct parenting support activities with children and their parents from FY2020 to FY2021 due to the outbreak of a new type of coronavirus infection (COVID-19). In the first semester of FY2022, first- and second-year students worked together to simulate realistic situations and improve their ability to respond to children by participating in activities and sending comments to each other by becoming each other's children. In this study, the effects of having students from other grades participate in the simulated activities as children were examined based on the students' survey responses and other data. As a result, fewer students felt that they learned more from the first and second graders who participated in the second mock activity than from the first mock activity in which each grade participated; it is possible that the first graders who participated as children in the first activity participated with the perception that they were participating to understand the flow and atmosphere of the activity. In addition, second-year students who had not reached the level of learning to think about childcare from the child's perspective may not have found the second and subsequent sessions meaningful. As with the simulated activities conducted by students who do not have sufficient knowledge or experience in childcare, it is necessary to devise ways to set goals in advance and present perspectives for reflection.

I. はじめに

保育者養成を目的に設立された高知大学教育学部の幼児教育コースでは、年間を通して、コース学生が主体となつて、学年ごとに実施する地域子育て支援活動を行ってきたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の影響を受け、地域の子どもを招いての開催は2020年から2021年度まで中止となっていた。しかし、この活動には学生の保育実践の力を養う目的もあることから、この期間、子どもや保護者が参加しない模擬の子育て支援活動（以下、模擬活動）を実施してきた。2021年度までの模擬活動は、1回の活動内で同学年の学生が場面ごとに保育者役と子ども役を交代しながら行ってきた。しかし、1学年が10名程度と少ないことから、子ども役の数は、地域の子どもが参加する実際の子育て支援活動時の半数以下であり、複数の子どもに対応する力の向上を図るには不十分と言わざるを得ない状況であった。

続く2022年度4月から8月までの期間（1学期）も、地域の子どもを招いての子育て支援活動は引き続き中止が決定したが、一方で10月以降は再開が見込まれる状況となった。しかし、2022年度入学の1年生はもちろん、2年生もコロナ禍のため、実際に子どもが参加する子育て支援活動を行ったことはなく、さらに、授業などで保育見学を行う機会も最低限に限られていたことから、学生の間からも不安の声が聞かれていた。

保育者養成校では、参加者が子ども役と保育者役に分かれて行う保育のシミュレーション、いわゆる模擬保育が学生の学びの機会として取り入れられることも多い。2017年に文科省が策定した教職課程コアカリキュラム¹でも、「教科及び教科の指導法に関する科目」の中の「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む.）」にある、(2) 保育内容の指導方法と保育の構想において、「幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。」という一般目標に対応した到達目標として4項目目に、「模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている」として、保育における対応力や実践力を養う授業法の1つとして明示されている²。保育実習に赴く前に、保育の実際場面を想定した模擬保育を行うとともに、その振り返りを丁寧に行うことで、学生は即応力はもちろん、見取る力や省察力を高めることができるとともに、自信をつけることで実際の子どもを前に保育者として立つという不安に対する助けになるとされている^{3,4}。

そこで2022年4月から8月までの期間は、模擬活動を少しでも実際に近い状況で行い、学生の子どもへの対応力向上を図るため、模擬活動の際、1年生と2年生が協力することを提案し、賛同したほとんどの学生が、お互いの模擬活動に子ども役で参加し、また、子ども役として互いの模擬

表1 模擬活動とアンケートの実施時期と内容の概要

子育て支援活動の模擬活動とアンケート実施時期

- 2022年度4月から8月までの期間に模擬活動を実施（1・2年生）
- 1-2年生とも、互いの模擬活動に子ども役として参加
 - 活動後アンケート1回目：1・2年生とも1回目の模擬活動を終えた後
 - 活動後アンケート2回目：1年生が3回目を、2年生が2回目を終えた後
- 11月に子どもが参加する地域子育て支援活動を実施（2年生）
 - 子どもが参加する実際の子育て支援活動実施後のアンケート（2年生）

アンケート内容（Microsoft forms上・匿名）

- 1回目の活動後アンケート（表1）：子ども役・保育者役で模擬活動を実施しての学びについて
- 2回目の活動後アンケート：1回目と同様の質問項目に加え、模擬活動の準備、活動内容、子どもへの対応などを5段階で評価する項目（表2）
- 実際の子育て支援活動実施後のアンケート（表3）：活動での学び、模擬活動が役に立ったかなど

活動に参加して気づいた点をコメントした。なお、1学期の間、1年生は4回、2年生は2回の模擬活動を実施した。本研究では、模擬活動に他学年が子ども役として参加することで得られた効果について、学生のアンケートの回答などを用いて検討した。

II. 研究の方法

2022年度4月から8月までの期間に模擬活動を実施し、また、他学年の模擬活動に子ども役として参加した後に2回（1・2年生とも1回目の模擬活動を終えた後と、1年生が3回目を、2年生が2回目を終えた後に）、学生にforms上で匿名のアンケートを実施した（表1）。

1回目の活動後アンケートでは、子ども役として模擬支援活動に参加した際、演じる子ども役について年齢などを想定したか、子ども役をしたことで学びや気づきがあったかや、保育者として模擬支援活動を実施して、子ども役の様子から学びがあったか、保育者役として自身らと他学年生に違いがあったかなどについての質問を設けた（表2）。また、2回目の活動後アンケートでは、1回目と同様の質問項目に加え、模擬活動を事前準備や活動内容、子どもへの対応などについて5段階で評価する項目を設けた（表3）。また、2年生は11月に子どもが参加する地域子育て支援活動を実施できたため、その後、2年生に実際の活動を行っ

表2 模擬活動後のアンケート（1回目）

<p><u>子ども役として参加して（1・2年生共通）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 演じる子ども役の年齢を想定したか <ul style="list-style-type: none"> －何歳と想定したか ・ 演じる子ども役の性格や気質を想定したか <ul style="list-style-type: none"> －どんな性格、気質と想定したか ・ 学びや気づきがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか（理由も含めて） ・ 今後も子ども役として参加したいか <p><u>保育者役として実施して</u></p> <p>（1年生）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども役の子どもの様子から学びがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか（理由も含めて） －学びが少ないと感じた理由は <p>（2年生）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども役の子どもの様子から学びがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか －学びが少ないと感じた理由は <p>（1・2年生共通）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者役として、自身らと他学年との違いは ・ 今後も子ども役の子どもの様子から学びがあったか

表3 模擬活動後のアンケート内容（2回目・抜粋）

<p><u>保育者として / 子ども役としての評価</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 準備物、段取りなど、事前準備は十分か ・ 安全面・衛生面に配慮できていたか ・ 活動内容は子どもが楽しんで遊べるものであったか ・ 保育者役の子どもの様子から学びがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか －学びが少ないと感じた理由は ・ テーマの達成も含め、全体としての出来は

表4 実際の子育て支援活動後のアンケート

<p><u>実際の子育て支援活動を実施して</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども役の子どもの様子から学びがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか －学びが少ないと感じた理由は ・ 子ども役の子どもの様子から学びがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか －学びが少ないと感じた理由は ・ 子ども役の子どもの様子から学びがあったか <ul style="list-style-type: none"> －どのような学びがあったか －学びが少ないと感じた理由は

での学びや、模擬活動が役に立ったかなどについてアンケートを実施した（表4）。回答は単純集計したほか、KH coderを用いた計量テキスト分析を行った。

III. 結果

学生の主観的評価について

1回目のアンケートでは、保育者として他学年の子ども役の子どもの様子から学びがあったかについて、2年生は、過去の模擬活動と比べて88.9%が「とても学びが多いと感じた」と答えた。一方、1年生で「とても学びが多いと感じた」と答えたものは50.0%であった（表5）。2年生は他学年の子ども役の子どもの様子から学びがあったかという点で、その経験と比較しての評価であるためこのような違いが出たと考えられ、学びがあった点やその理由としてあげられた内容でも、1年生は「自身らが想定していなかった反応」を上げたものが多かったが、2年生では「多人数の子ども役を動かすことの難しさ」を上げたものが多かった。また、2年生では、指導案の流れを知らない学生がいることで、より臨機応変な対応が必要であるという気づきが挙げられていた（表6）。

一方、子ども役として他学年の模擬活動に参加したことによる学びについて、1年生は88.8%が「大いに学びや気づきがあった」と答えたが、2年生は66.6%であった（表7）。1年生は模擬活動自体はじめて経験するため、進め方や言葉かけの方法が勉強になったと答えた学生が多かった。対して、2年生では、子どもとしての視点から活動をみることによる新しい気づき・学びが複数あげられており、昨年度1年間の学習や模擬活動と省察活動を行った経験が学びにつながっていると考えられる（表8）。

また、子ども役として参加した際、自身が演じる子どもの年齢を想定した学生は60%（1年生 55.6%、2年生 66.6%）であった。また、演じる子どもの性格を想定した学生は86%（1年生 88.9%、2年生 83.3%）で、子ども役の子どもの年齢・性格ともに想定して参加した学生は53.3%（1年生 55.6%、2年生 50.0%）であった（表9）。1年生は性格を、2年生は年齢を想定していた学生が多く、子ども理解や子どもの発達を学習する前の1年生と、既に学習した2年生とで重視した点が異なっていた。この違いが、子ども役としての反応の違いにも表れたものと考えられ、2年生の子ども役は、保育者役の1年生が「想定していなかった」反応を多くしていたようである。

2回目のアンケートでは、保育者として他学年の子ども役の子どもの様子から学びがあったかについて、41.1%（1年生 50.0%、2年生 33.3%）が「とても学びが多い」、58.8%が「まあまあ学びが多い」と感じたことと答えた（表5）。学びがあった点やその理由として、1年生は子ども役の反応を上げ、2年生は人数や時間を上げていた（表6）。

表5 模擬活動で保育者をつとめて、子ども役の学生がいることによる学び・気づきはあったか (%)

	学年	大いに学びや気づきがあった	まあまあ学びや気づきがあった	あまり変わらないと感じた
アンケート	1	4 (50.0)	3 (37.5)	1 (12.5)
1回目	2	8 (88.9)	1 (11.1)	0 (0.0)
アンケート	1	4 (50.0)	3 (37.5)	1 (12.5)
2回目	2	3 (33.3)	6 (66.7)	0 (0.0)

表7 模擬活動に子ども役として参加して、どのような学びや気づきがあったか (%)

	学年	大いに学びや気づきがあった	まあまあ学びや気づきがあった	あまり学びはなかった
アンケート	1	8 (88.9)	1 (11.1)	0 (0.0)
1回目	2	4 (66.7)	1 (16.7)	1 (16.7)
アンケート	1	4 (50.0)	4 (50.0)	0 (0.0)
2回目	2	2 (50.0)	2 (50.0)	0 (0.0)

表6 保育者役として模擬活動に参加して、どのような学びがあったか

(1年生)	(2年生)
<ul style="list-style-type: none"> ・こちらが少し困るような反応・自分たちが思いつかなかった反応 ・1人で複数人みることの大変さ ・自分たちの声掛けの仕方、バリエーションが少ない ・部屋の環境や準備物も子どもに影響し、子どもが何を考えるのか、何に興味を持ってくれるのかが変わる ・指導案やリハーサルだけでは子どもの動きをしっかりと予想しきれない ・問いかけや説明の際、子どもには内容が難しかったり理解しにくかったりする ・保育者としての時間の管理 ・子どもの反応を見ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども役が多くいることで子どもの動きが分かりやすくなった ・指導案を知らない子ども役の参加で、臨機応変な対応・遊びへの動機づけの大切さを感じた ・多くの子どもたちの行動を把握しなければならない点実践に近づいた ・場の盛り上がりや複数の子どもの動かすことの難しさを学んだ ・子ども役が多いことで、動線の確保や材料の準備など、実践に近づいた ・保育者役に専念できて、落ち着いて周りを見ることができた ・子ども役が増えたことで言葉がけをする機会が増え、言葉のレパートリーの大切さ、言葉がけの難しさを感じた ・実際に指導案を知らない相手が自由に動いたことで、突発的な状況が発生した ・自分たちの説明では理解しづらい可能性があることを考慮すること ・実際にかかる時間や、子どもが一斉に来た時の対応など ・子どもどうしの関わりを促す声かけの難しさ

表8 子ども役として模擬活動に参加して、どのような学びがあったか

(1年生)	(2年生)
<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの内容・子どもへの問いかけ方や関わり方 ・今何をやる時間だろう？と感じることがなかった ・子どもにかけられる声掛けの種類を学んだ ・子どもたちが話す機会を作るような声掛け ・子どもの選択の自由度が大きかった点 ・子どもが興味を持ちながら飽きないような工夫 ・何を想定して幼児の援助をしているのか ・導入から主な活動への流れのスムーズさ ・模擬活動の実施のしかたを体験して知ることができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども役どうしで話す機会が少なく、子どもどうしの交流が大切であることを学んだ ・保育者側をしているときは感じなかったが、子ども役として聞いていると場面転換についていけないと感じた ・対応する学生の人数配分や言葉がけなどがいつもとは違う視点で考えられた ・子どもの立場から見たことで、自分たちが保育者役として実施した際に、先生方からいただいたアドバイスを身をもって理解した ・客観的な視点から取り組みを見ることができた ・はじめのあいさつでのペープサートの使い方

表9 自身が演じる子どもの年齢・性格の想定 (%)

アンケート	学年	年齢の想定率	性格の想定率
1回目	1	5 (55.6)	8 (88.9)
	2	4 (66.6)	6 (83.3)
2回目	1	4 (50.0)	8 (75.0)
	2	3 (75.0)	4 (50.0)

表10 子どもが参加する子育て支援活動を実施して

子どもがいる活動での学び（模擬活動との違い）

- ・ 予想できなかった反応や行動
- ・ どのように子どもたちの気持ちを活動に向けていくのかを考えながら行動することができた
- ・ 子どもの想定外の行動に気づいたら、どのように言葉掛けをするのかなどについて学ぶことができた
- ・ 実際の子どもはどのようなことに興味を持つのかを学ぶことができた

模擬活動での子ども役は、どのように役立ったか

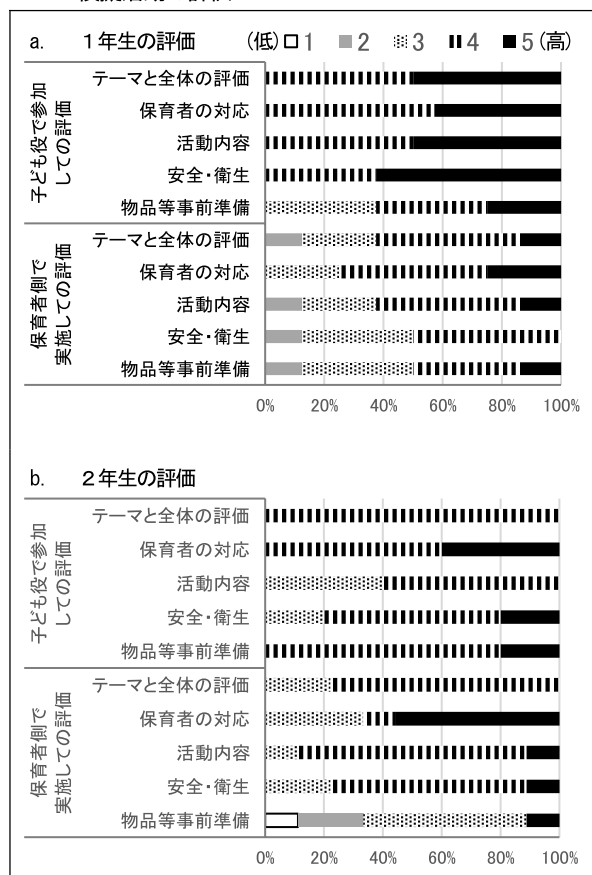
- ・ 全員が学生として動くことで連携の難しさや、リハーサルの大切さなどを学ぶことができた
- ・ 子ども役になりきってもらったことによって想定外の行動が起こり、それに対応することが出来たため
- ・ それぞれが担当の作業をしながら全体を動きを見ることの練習になったと感じる
- ・ 実際の子どもたちの姿は学生の子ども役と全く違った

1・2年生とも、1回目より「とても学びが多い」と答えた学生が減っており、1年生は自分たちで模擬活動を2回行って進め方などがある程度わかっていたこと、2年生も1回目に子ども役の人数が多い状態を経験して、必要な準備などの想定ができていたためと考えられる。

また、子ども役として他学年の模擬活動に参加したことによる学びについては、50.0%が「大いに学びや気づきがあった」と答えた(表7)。得られた学びやその理由として、1年生も子どもの立場になることで気づきを得られたことを上げたものが多くなっていた(表8)。1・2回目の模擬活動やその後の省察活動を通して、こども理解の大切さの理解や、保育活動を観る視点が形成されたことが、この変化につながったと考えられる。

2回目のアンケートで行ったそれぞれの模擬活動の評価では、2年生は子ども役として参加した1年生の活動に対して、活動内容や安全・衛生などに不十分な点があると評価していたものがあつたのに対し、1年生は物品などの事前準備を上げていた(図1)。保育者として自身らが実施した活動の評価については、1年生と2年生で大きな違いは見られなかったが、2年生は物品などの事前準備の不十分さを感じていた(図1)。

図1 保育者役として実施した/子ども役として参加した模擬活動の評価

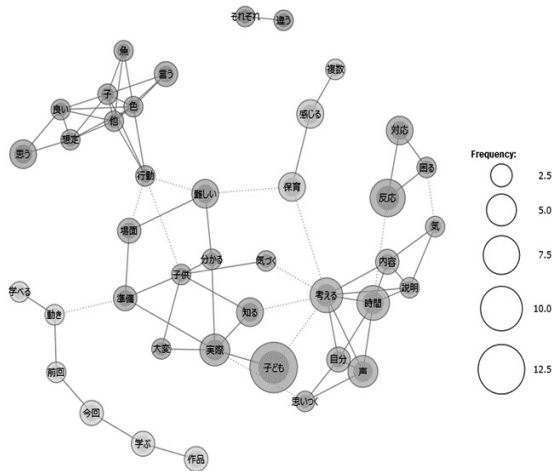


共起ネットワーク分析

図2は、1・2回目を通して、1年生が保育者役として活動を実施しての学びとその理由から共起ネットワーク図を作成したものである。「子ども—実際—準備—場面」の単語のつながりから、子どもとの活動場面やその準備の大変さや難しさについて述べたグループがあること、そこからつながる「時間—考える—声—説明—内容」という単語のつながりは、活動場面での時間管理や、子どもへの説明、活動内容など、子ども役に対する援助について述べたものであり、子育て支援活動を実施する際の基本的な準備や手順、援助などについての学びに関する言及が多いことが分かる。一方、図3は2年生が保育者役で活動を実施しての学びと理由から共起ネットワークを作成したものである。最頻出語は「子ども」でそこから「実際」「反応」「状態」などの言葉の第2グループ、子ども役と実際の子どもの反応の相違に関わる言葉、「人数」「多い」という第6グループと結びれており、保育者役をする学生にとって、子ども役の学生に実際の子どもらしい動きを期待することが分かる一方、人数の多さが第一の学びとなってしまった学生の存在が推察できる。

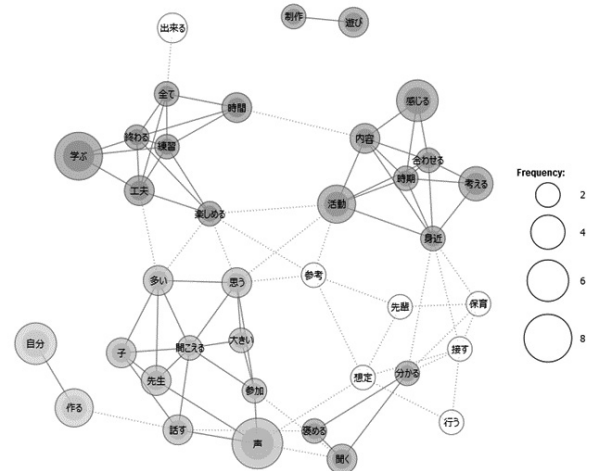
同様に、1年生が、2年生の活動に子ども役として参加し

図2 1年生が「模擬活動で保育者役を実施して得た学びとその理由」の共起ネットワーク図



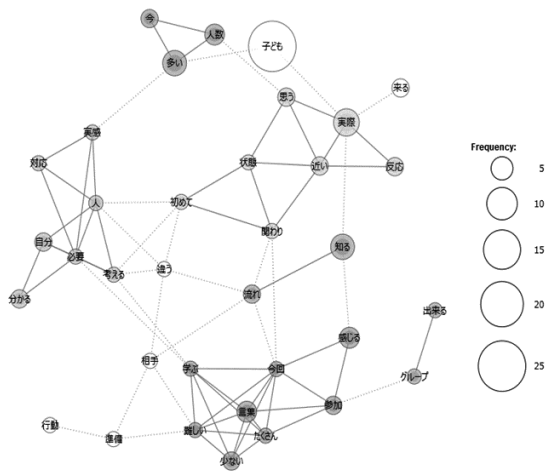
※ 円の大きさは語の出現数を、円を結ぶ線は共起関係を示す

図4 1年生が「模擬活動に子ども役で参加して得た学びとその理由」の共起ネットワーク図



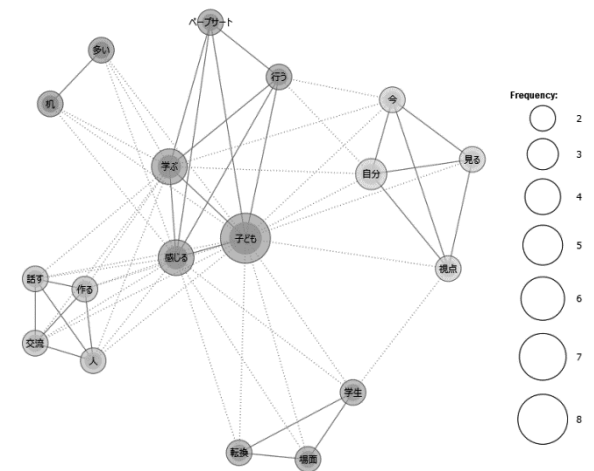
※ 円の大きさは語の出現数を、円を結ぶ線は共起関係を示す

図3 2年生が「模擬活動で保育者役を実施して得た学びとその理由」の共起ネットワーク図



※ 円の大きさは語の出現数を、円を結ぶ線は共起関係を示す

図5 2年生が「模擬活動に子ども役で参加して得た学びとその理由」の共起ネットワーク図



※ 円の大きさは語の出現数を、円を結ぶ線は共起関係を示す

て得た学びとその理由から作成した共起ネットワーク図が図4、2年生が1年生の活動に参加して得た学びと理由の共起ネットワーク図が図5である。こちらも1年生は活動内容や、援助の工夫など、子育て支援活動を実施する際の基本的な知識・技術についての学びを得たことが分かる。

ここまでは模擬活動での学びであるが、2学期に実際に地域の子どもを招いて行った地域子育て支援活動の後に2年生に実施したアンケートでは、実際に子どもがいる子育て支援活動と昨年度実施した子ども役の他学年生のいない模擬活動、及び、1学期に実施した子ども役の他学年生のいない模擬活動とを比較して、「とても学びが多い」と答えた学生が87.5%であった。得られた学びやその理由として、

「とても学びが多い」と答えた学生全員が「自分たちが想定していない子どもの言動」（もしくは、それに伴う進め方の難しさ）を上げており（表10）、言動の予想が難しい子どもを実際に目の前にしての学生の学びの大きさが再確認される結果となった。

IV. 考察と今後の課題

上月（2019）は、反応や行動を予測しづらい幼児を対象とする保育の実践力を高めるためには、やはり実際に子どもを目の前にして保育を行うことが望ましく、保育に関する知識や実習経験が不足した学生同士で模擬保育を行う場合、目標設定の置き方や準備、振り返りなどに十分な工夫

が必要であると述べている。

今回、子ども役として他学年の模擬活動に参加する際、1年生はまだ慣れていないことから、流れや雰囲気を理解するためと認識して参加していた。そのため、1回目に子ども役として参加して流れや雰囲気を理解したことで、目的を終えたと考えた学生は、それ以上の学びにつながらなかった可能性がある。また、2年生は子ども役への参加を、1・2年生がお互いに実際に子どものいる形に近い模擬活動を経験するため認識していたと思われる。そのため、子どもの視点で保育を考える学びにたどり着かなかった学生は、子ども理解の不十分な1年生の模擬活動に子ども役として参加すること、また、自分たちの模擬活動に参加してもらうことに意義を感じられなかったと思われ、子ども役としての参加を取りやめたものもいた。模擬保育では保育者役をすることで学ぶことが特に大きいと、杉村・安東(2018)は、子ども役をすることで、子ども理解の重要性や自身の子ども理解の不足、また、子どもの視点からの保育者の言動の解釈などが促されると述べている。今回行ったような模擬活動でも、子ども役として参加する際に特徴のある子ども役を入れるよう指示する、観点を示して保育の観察・評定をさせるなど、学生の学びを高めるさらなる工夫が必要であると考えられる。

また、今回の模擬活動では、1年生と2年生がそれぞれの活動に対してコメントは送り合ったものの、授業のスケジュールの関係上、模擬活動の振り返りを行う際には、互いの学年は立ち会っていない。模擬保育を行う際は、模擬保育そのものはもちろん、その省察とそれを共有する振り返りの活動が重要であるとされ⁷、保育者役、子ども役、観察者がそれぞれの立場から、複数の目で問題点や改善点を出し合いって共有し、それによって自身の行為を客観的に見つめなおすことがより高い学びや実践につなげるために必要であるとされている⁸。今回は、学生が互いの学年の振り返り場面に立ち会うことができなかったことにより、特に子ども役として参加した模擬活動においては、学生それぞれの気づきや省察の深さは、学生個々の資質によって異なる結果となった可能性も考えられる。このように、互いの振り返り場面に立ち会えない場合でも、要点をまとめたレポートを共有するなどの工夫をする必要があるだろう。

以上のように、子育て支援活動のような1回限りの催しの模擬活動でも、模擬保育をする際のように、子ども役として参加する際に特徴のある子ども役を入れるよう指示する、観点を示して保育の観察・評定をさせる、子ども役、保育者役それぞれの視点から振り返りをするなどの工夫が学生の学びを高めるためには必要であろう。

倫理的配慮

本研究の実施に当たって、参加する学生全員に調査の意

義と目的を説明して、事前に書面にて同意を得た。また、アンケートはwebにて無記名で行い、協力は学生の任意とした。

謝辞

本研究は、令和4年度 高知大学教育学部 学部長裁量経費の助成を受けて実施された。

付記

本論文の一部は、日本保育学会第76回大会(2023年5月13-14日、オンライン開催)にて「保育学生による他学年で協同する地域子育て支援活動シミュレーションの実践—模擬活動での学びにおける子ども役の意義、学びを高めるために必要な工夫とは—」(発表者:竹内日登美,三ツ石行宏,玉瀬友美,川俣美砂子)として発表されたものである。

文献

- 1 文部科学省(2017) 教職課程コアカリキュラム https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm
- 2 猪田裕子,久保木亮子,塩津恵理子(2019) 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察(2) 神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報 1:3-13
- 3 畑啓子,池上貴美子,上田智佳,種子田順子(2017) 初心者学生の模擬保育見学による意識変容に関する縦断的調査 甲子園短期大学紀要 35:47-52
- 4 猪田裕子,久保木亮子,塩津恵理子(2018) 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察(1) 神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報 1:17-27
- 5 上月智春(2019) 保育内容総論における模擬保育と学生の学び. 京都女子大学教職支援センター研究紀要 第1号. 15-27
- 6 杉村智子・安東綾子(2018) 保育内容の指導法における模擬保育実践—能動的な共同による学びの視点から—. 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要 第3号, 77-87
- 7 大篠あこ(2020) 保育実践が学生にもたらす学びについての考察—模擬保育の体験が与える保育に関する本質的気づき—. 桜美林論考. 教職研究 第5号, 42-49
- 8 三好年江・石橋由美(2005) 授業「乳児保育II」の模擬保育から学生が学んだこと. 新見公立短期大学紀要 第26巻, 151-160

